

# Newsletter

July 1, 2003

2

## CONTENTS

第1回国際シンポジューム  
開催

1  
2  
3  
4

コミッティー・メンバー紹介

5

2002年度  
研究成果

6  
7  
8

お知らせ

8

21世紀 COE

## 心の文化・生態学的基盤 に関する研究センター

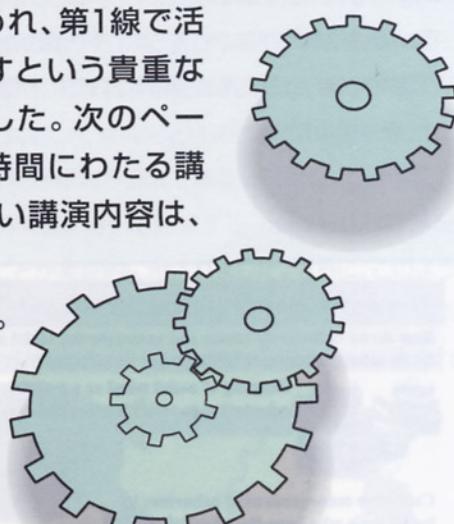
北海道大学大学院文学研究科・教育学研究科

国際

### 第1回 シンポジューム 開催

## “Cultural and Ecological Foundations of the Mind”

6月23日から26日まで、“心の社会性”を追究する第1線で活躍中の研究者をパネリストとして、CEFOM/21主催第1回国際シンポジューム “Cultural and Ecological Foundations of the Mind”を開催し、文化心理学者、社会心理学者、進化心理学者、経済学者、行動生態学者からなるパネリストの間で活発な意見の交換が行われました。また初日である23日の夕方には若手研究者を中心としたポスター発表が行われ、第1線で活躍中のパネリストと直接に議論を交わすという貴重な機会を若手研究者が持つことができました。次のページに、パネリストの略歴と、それぞれ2時間にわたる講演と質疑応答の内容を紹介します。詳しい講演内容は、CEFOM/21のウェブページに紹介されていますので、そちらをごらんください。  
<http://lynx.let.hokudai.ac.jp/COE21/>



### CEFOM/21に対するインターナショナル・アドバイザリーボード発足

CEFOM/21での活動と他の研究拠点での活動とのコーディネーション促進をはかるため、世界の主要研究拠点を代表する方々からなるインターナショナル・アドバイザリーボードを発足させました。今後、アドバイザリーボード・メンバーは20名程度まで増やす予定にしています。コミッティーの現在のメンバーと研究拠点は5ページを御覧ください。

## “Cultural and Ecological Foundations of the Mind”

### 第1回 国際シンポジューム

#### 基調講演

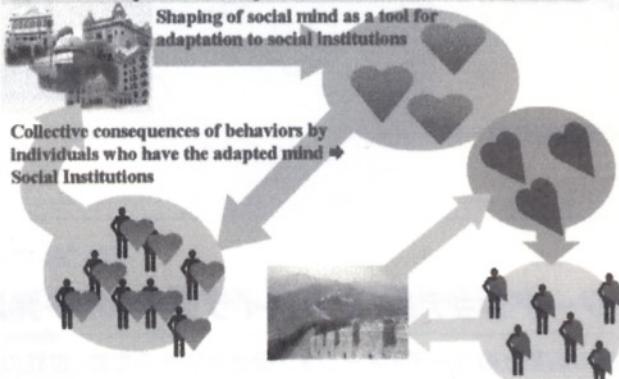
山岸俊男



シンポジュームは23日に、山岸俊男の基調講演 “Cultural and Ecological Foundations of the Mind” を皮切りに開催されました。この基調講演で山岸は、CEFOM/21の目的が人間の社会性の解明にあること、そしてその解明にあたり、人間の行動が生み出す社会的環境としての “社会制度” が生み出す適応課題を重視する点に、本研究拠点における研究の特色があることを説明しました。そしてまた、本研究拠点のもうひとつ特徴として、インターネットを通した国際共同実験を含む、制度と心の相互関係を明らかにするための実験研究を重視している点の説明がなされました。下の図は、心と社会との関係が制度を媒介として形成・維持されている様子をイメージ化した、講演用の画面です。

#### Human Sociality: Its Origin, Nature, and Consequences

How do we collectively create and maintain the social environment that forms selection pressure to shape our social mind?



## Why are homicide rates so variable between times and places?

Martin Daly & Margo Wilson



Martin DalyとMargo Wilson (Department of Psychology, McMaster University, Canada)両教授は、進化心理学の創始者グループの主要メンバーであり、現在、Human Behavior and Evolution Society の機関紙である Evolution and Human Behavior の編集者を務めています。今回のシンポジュームでは、両教授は、進化心理学的視点からの殺人行動の意味についての講演を行いました。講演では、①殺人率は国別データで比較してもシカゴの近隣別データで比較しても、平均所得とは相関しないが、所得格差の指標であるGINI係数と相関すること（所得格差が大きい地域ほど殺人発生率が高い）、②男性と女性とを比較した場合、（特に若年の）男性が殺人行動をとる頻度が高い、③殺人発生率の地域差は、進化論上の概念である「性淘汰」の影響によってよく説明される（繁殖率の個体間分散は一般に雄（男性）の方が大きいため、若い男性において配偶者獲得のための競争が激しい）、④未来の割引率（future discounting rate）に関する心理実験（男性被験者は魅力的な女性の写真を見たあとに現在より未来の現金の価値を極端に低く見積もるようになる、すなわち性行動に関係しない意思決定においてさえ衝動性が高まる）によっても③の仮説は支持される、などの知見が説明されました。

## Measuring norms of cooperation in different societies

Simon Gächter



Simon Gächter (Research Institute for Empirical Economics and Economic Policy, University of St. Gallen, Germany)教授は、実験経済学の手法をもちいた社会規範（social norms）に対する「利他的制裁（altruistic sanction、他者の協力行動に“ただ乗り”して利益を得る者（free rider）に対して、自分がたとえ損を

してでも罰を与えること)」の影響の研究などを行っています。一般に、協調行動が集団内で発達していくことを、ただ乗り行動が妨げてしまうこと (cooperation problemとかfree rider problemと呼ばれています) が知られており、その集団の構成員の自発的な行動のみによってこの問題を解決する方法の探究等がこの分野の研究者の中でも重要な研究テーマとなっています。最近、Gächter教授らは、西側欧米諸国の被験者を対象として「利他的制裁が行われる場合には、「ただ乗り」が減少し、協調が増加することを見出しました (Fehr & Gächter, Nature 2002)。この知見(①)に加えて、②文化圏によって協調や信頼の度合いが異なる (Yamagishi, 1986など) こと (西ヨーロッパと大きく異なる文化圏における「協力行動と利他的制裁との関係」の研究が重要であることがわかります) や③協調・信頼が“社会資本”とみなせる、ことを考慮に入れ、さまざまな地域・条件下で、「協力行動と利他的制裁との関係」がどのように異なっているのかを研究しました。その結果、①東ヨーロッパ (特に旧ソ連圏) の被験者では、「制裁を受ける可能性があっても協力行動が高まりにくい」ということや②東ヨーロッパの被験者では協調に対する倫理や(怒りなどのネガティブな)感情が西ヨーロッパ地域と異なること、などが示されました。

## In search of a sustainable group decision-making institution: The robust beauty of the majority rule

亀田 達也 & Reid Hastie



亀田達也(北海道大学)、Reid Hastie (Center for Decision Research, University of Chicago) 両教授は、進化的なコンピュータ・シミュレーション手法を用いて集団的意志決定の定量的な研究を共同で行っています。多数決原理 (majority rule) の適応的基礎に関する講演を行いました。従来、経済学者 Arrow らが行ってきた、論理的整合性 (coherence) のみを意志決定法の優劣の基準にするというアプローチでは、完全に合理的な個人を仮定した場合、『多数決原理による集団的意志決定は、循環順序などの論理的矛盾が生じるため、「独裁 (best member rule)」より劣る』という結論が得られてきました (いわゆる Arrow の不可能性定理など)。このため、多数決原理が幅広く使用されているという社会的事実やその正当性を、規範的にも実証的にも説明できませんでした。今回、両教授が提唱した新しいアプローチでは、論理的整合性 (coherence) よりも、

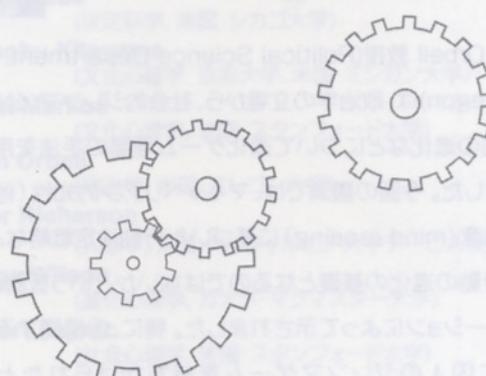
適応環境の構造を反映した意思決定ができるかという正確さの基準 (correspondence) のほうが集団的意志決定方法を評価する上で適切であることに着目しました (意志決定主体は、変化する不確実環境のもとで、論理的一貫性というよりは「適応度」をあげるよう決定しているはずだからです)。この考え方に基づき、両教授は、モンテカルロ法を用いた進化的シミュレーションを行い、majority rule の方が best member rule よりも高い “correspondence” をもつことを示しました。この結果をもとに、現実の社会制度として、「独裁制→民主制」の移行はしばしば起こるのに対してその反対の過程が起りにくいくことの説明なども行われました。

## Focusing and dividing strategies of attention: constructor, carrier, and stabilizer of culture

北山 忍



北山忍教授 (京都大学・University of Michigan) は、文化心理学の手法・視点を用いて、西欧文化圏において見出された心理学理論が、他の文化圏においては成立しないのではないかという問題意識 (心的普遍性に対する疑問) に基づいて文化の自己観・情報処理に対する影響の研究を行っています。今回のシンポジウムでは、西洋・東洋間の文化差が注意の向け方や配分に対して与える影響などに関する講演を行いました。教授自身やその共同研究者たちの最近の研究から、西洋文化においては周囲とは切り離して対象に注目する “analytic” な注意配分傾向が優勢であるのに対して、東洋においては対象と背景との関係において知覚する “holistic” な注意配分傾向が優勢であることが実証的に示されました。さらに、このような注意配分の文化的な傾向は、5,6歳児すでに見られることを示す最近の実験データが紹介され、文化的な傾向の伝承性が示唆されました。



## Ways of being: sociocultural diversity in models of agency

Hazel Markus



Hazel Markus教授(Center on Adolescence, Stanford University)は、行動制御における「自己」の役割に関する研究を行ってきました。Hazel Markus教授の最近の文化心理学的研究では、個人の心理学的構造と、社会的・文化的環境との相互依存性に重点が置かれています。今回のシンポジュームでは、まず、自己のあり方やその捉え方・通念が文化によって異なっており、アメリカなどの西洋中流社会においては相互に独立した存在として自己は捉えられているのに対して、日本などの東洋社会においては互いに結びついて関係の中に埋め込まれたあり方としての自己が捉えられていることが説明されました。そのような文化間の相違は、文化のさまざまな側面において見られることが、教授の最近の研究や、CMや広告など豊富な事例と共に説明されました(例えばスポーツインタビューで、アメリカのメダリストは勝利が確定した瞬間に喜びを爆発させるのに対して、日本のメダリストの喜びの表現はコーチと共にいるときによく見られ、このような違いは教授が説明された「自己」に関する文化的差異と整合的です)。

## "Machiavellian" Intelligence as a basis for the evolution of cooperative dispositions

John Orbell



John Orbell教授(Political Science Department, University of Oregon)は、政治学の立場から、社会的ジレンマ、公共選択論、協調行動の進化などについて進化ゲーム理論の手法を用いて研究してきました。今回の講演では、マキャベリアン的知性(他者の心に対する信念(mind reading)に基づいた行動決定戦略など)の存在が、協調行動の進化の基礎となるのではないかという仮説が、進化的ミュレーションによって示されました。特に、①協調する確率が低い個体に囚人のジレンマゲームを持ちかけられたときにmind

readingが重要であり、②相互協調によってもたらされる利得が裏切りによってもたらされる利得を上回らない程度に高いときに協調行動が進化する、③ヒトのような社会性の動物には、mind reading能力が備わっており、高い程度の協調性をもつことが示唆されました。

## Did climate deterioration play major roles in human evolution?"

Peter Richerson



Peter Richerson教授(Department of Environment Science and Policy, University of California, Davis)は、生態学的・進化的観点から、①いろいろな速さの気候変動、②脳のサイズの増大、③人類の文化の起源、④人類進化の進歩的傾向、⑤農業の起源、⑥現在の気候変動の影響、の6つのトピックについて語りました。氷床を形作る水分子を構成する酸素原子の同位体( $^{18}\text{O}$ )の存在比率から氷床の作られた地質年代が推定できますが、そのデータによると過去において(数)千年くらいの(進化的、地質学的にみて)比較的短い期間での気候の大幅な悪化がおきたことがわかります(原因としてはチベットプレートの隆起による地表の太陽光反射率の変化が考えられます)。さらに、環境変動が大きくて、変動速度がある範囲内に収まっているならば、「文化」の獲得が適応上有利になることから、大きな環境変動が、脳体積の増加の方向に進化をすすめる可能性が示唆されました。最後に、現在の地球温暖化の進むスピードが、地質学的にみてもかなり速く、人間の適応に影響を与えるのではないかという懸念も示されました。

## Social institutions and social adaptation tasks: An error management approach

山岸俊男



山岸俊男教授(社会心理学・北海道大学)は、社会制度と社会適応課題に関する講演を行いました。まず、①ヒューリスティックな意思決定規則が、特定の社会制度に適応するために必要であること、②デフ

オルトの意思決定規則としてどのようなものが採用されるかは、error management の論理に依存すること、③デフォルトの意思決定規則は、その主体が置かれている“ゲーム構造”によって変化すること、④“ゲーム構造”・社会制度は、相互依存的に変化して、構成員により共有されたデフォルト意思決定ヒューリスティックを適応的にするような self-sustaining な状態に落ち着きやすい、という4つの論点が提出され、解説がなされました。まず、agent problem(遠方の代理人をどのように制御するか、という問題。代理人は自身のことを知っているが派遣するほうは知らないという“情報の非対称性”が存在します)を例にとり、山岸教授は、(A)集団主義的(Collectivistic)社会制度(GreifによればMaghribi型)と(B)個人主義的(Individualistic)社会制度(Genovese型)を仮定した場合その“ゲーム構造”の中で適応するためにとられる戦略がどう異なるか、という説明をしました。(A)の場合、1) グループ間の境界を超えて移動するインセンティブを最小化すること、2) 相互監視・制裁による社会秩序形成がなされること、また3) 排他主義が必要となることが示唆されます。実際、(B)の理念型に近いアメリカ社会に比べて、より(A)の理念型に近いと考えられるアジア文化圏ではより同調性が高い傾向がみられることが、色のついたペンを選ばせる実験により知られています。また、日本人は、デフォルトでは自己の能力を平均より過小報告することも見いだされました(Gong, Suzuki, Yamagishi, 2001)。さらに、日本人被験者も、おかれた状況(ゲーム構造)によって適応戦略を変化させることを示す実験結果も紹介されました(上記論点③、④に関係)。また、error management に関して(論点②)は、行為者は「もっとも致命的なエラーを避けようとする傾向」をもつため、「致命的になるエラータイプ」が社会制度によって異なれば、適応戦略もそれに応じて変化することが示されました。

## Preferences

Robert Zajonc



Robert Zajonc 教授(Department of Psychology, Stanford University)は、社会的行動/認知を理解する上で、意識的・認知的な心的過程だけでなく、(時には無意識の)感情的な反応過程も大きな役割を果たしていることを発見したことで有名な社会心理学者です。今回は、特に “preference(「選好」、「好みの順序」のようなもの)”

が決まる上で、無意識的感情反応のプロセスが重要な要因となっていることを示す “mere exposure effect(「単純接触効果」、以下 exposure effectと記します)”に関する講演が行われました。exposure effectとは、「高頻度で呈示された“刺激”に対する選好が高まる」現象のことです。exposure effect を発見するまでに至ったヒューリスティックな思考プロセスもお話をいただきました。彼はまず、心理学において古くから知られている古典的条件付け(classical conditioning)に着目しました。古典的条件付けの例として、瞬目反射条件付け(eyeblink conditioning)があります。動物の目に空気を吹きかける刺激(unconditioned stimulus(US)と呼ばれます)を与えると目の瞬きが起こりますが、その前に音(unconditioned stimulus(CS))を聞かせることを繰り返す(“US→CS”を繰り返す)と、その動物は音を聞いただけで瞬きするようになります。Zajonc 教授は、ここで、「US=単語(や人)の呈示」→「CS=何も起こらない(その動物に何も刺激を与えない)」という状況を考えました。この場合、CSは「生存が脅かされない」状態として、「少なくとも無害である」ので「より好ましい」はずです。そのため、“US=単語(や人など)の呈示”→“CS=何も起こらない”という過程を繰り返すと、その単語などを呈示しただけで「好ましさ」の感情(preference)が生まれるはずです。このようなアイデアに基づいて行われた、人間においても exposure effect が存在することを示す数々の実験の紹介が行われました。

## アドバイザリーコミッティー・メンバー

(敬称略、アルファベット順)

- Karen S. Cook  
(社会科学・米国・スタンフォード大学)
- Martin Daly  
(進化心理学、カナダ・マクマスター大学)
- Simon Gächter  
(実験経済学、ドイツ・セントギャレン大学)
- Reid Hastie  
(決定科学、米国・シカゴ大学)
- Shinobu Kitayama  
(文化心理学、京都大学、米国・ミシガン大学)
- Hazel Markus  
(文化心理学、米国・スタンフォード大学)
- John Orbell  
(政治学、米国・オレゴン大学)
- Peter Richerson  
(人類学、米国・カリフォルニア大学デービス校)
- Margo Wilson  
(進化心理学、カナダ・マクマスター大学)
- Robert Zajonc  
(社会心理学、米国・スタンフォード大学)

## 2002年度研究成果

(事業推進担当者による研究業績)

### ■著書

- 煎本孝 (編著) (2002). 『東北アジア諸民族の文化動態』. 北海道大学図書刊行会 (566頁)
- 煎本孝 (2002). 『カナダ・インディアンの世界から』. 福音館書店 (278頁)
- Irimoto, T. (in press). The eternal cycle: Ecology and worldview of the reindeer herders of Northern Kamchatka. *Senri Ethnological Reports*, National Museum of Ethnology.
- Irimoto, T., & Yamada, T. (in press). Circumpolar ethnicity and identity. *Senri Ethnological Studies*, National Museum of Ethnology.
- 小杉康 (2003). 『縄文のマツリと暮らし』. 岩波書店 (140頁)
- 佐伯胖・亀田達也 (編著) (2002). 『進化ゲームとその展開』共立出版 (310頁)

### ■分担執筆

- Adachi, M., & Chino, Y. (in press). Creative music making for everyone. In S. Lau (Ed.), *Creativity: A moment of Aha!* Hong Kong: The City University of Hong Kong Press.
- Adachi, M., & Honda, A. (2002). Children's imagination in music. In T. Kato (Ed.), *Proceedings of the 17th congress of international association of empirical aesthetics* (pp. 457-462). Osaka, Japan: Organizing Committee of the 17th Congress of International Association of Empirical Aesthetics.
- Adachi, M., Nakata, T., & Kotani, Y. (2002). Infants encountering music: An exploration of musical affordances. In C. Stevens, D. Burnham, G. McPherson, E. Schubert, & J. Renwick (Eds.), *Proceedings of the 7th international conference on music perception and cognition* (pp. 454-456). Adelaide, Australia: Causal Productions.
- 菱谷晋介 (2002). 学習と認知. 弓野憲一 (編) 『発達・学習の心理学』 (pp. 113-126). ナカニシヤ出版.
- 石黒広昭 (2002). フィールドリサーチにおける調査倫理. 国立国語研究所編 『日本語教育年鑑』 (pp. 18-32). くろしお出版.
- 煎本孝 (2002). 東北アジアの自然、文化、言語. 煎本孝 (編著) 『東北アジア諸民族の文化動態』 (pp. 1-7). 北海道大学図書刊行会.

- 煎本孝 (2002). モンゴル・シャマニズムの文化人類学的分析—内モンゴル、ホルチン・ボのシャマニズムにおける歴史意識と宇宙論的秩序. 煎本孝 (編著) 『東北アジア諸民族の文化動態』 (pp. 357-440). 北海道大学図書刊行会.
- 煎本孝 (2002). 東北アジア諸民族の文化動態. 煎本孝 (編著) 『東北アジア諸民族の文化動態』 (pp. 545-550). 北海道大学図書刊行会.
- Irimoto, T. (in press). Anthropology of ethnicity and identity. In T. Irimoto, & T. Yamada (Eds.), *Circumpolar ethnicity and identity*. *Senri Ethnological Studies*, National Museum of Ethnology.
- Irimoto, T. (in press). Creation of the Marimo Festival. In T. Irimoto, & T. Yamada (Eds.), *Circumpolar ethnicity and identity*. *Senri Ethnological Studies*, National Museum of Ethnology.
- Irimoto, T. (in press). Preface. In T. Irimoto, & T. Yamada (Eds.), *Circumpolar ethnicity and identity*. *Senri Ethnological Studies*, National Museum of Ethnology.
- Kameda, T., Hulbert, L., & Tindale, R. S. (2002). Procedural and agenda effects on political decisions by small groups. In V. C. Otatti, R. S. Tindale, J. Edwards, F. Bryant, L. Heath, D. O'Connell, Y. Suarez-Balcazar, & E. Posavac (Eds.), *The social psychology of politics* (pp. 215-240). New York: Plenum Press.
- 亀田達也・高野陽太郎 (印刷中). 結果の解釈—実験結果の解釈を中心に—. 高野陽太郎・岡隆 (編) 『心理学研究法』. 有斐閣.
- Kameda, T., Tindale, R. S., & Davis, J. H. (in press). Cognitions, preferences, and social sharedness: Past, present, and future directions in group decision making. In S. L. Schneider & J. Shanteau (Eds.), *Emerging perspectives on judgment and decision research*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Kato, H., & Shevkumud, I. Ya. (2002).
- Kazama, M., & Abe, J. (2002). Phonological development in Japanese 4-year-old children: Examining the correlational relationships with other cognitive abilities. In Y. Shirai, H. Kobayashi, S. Miyata, K. Nakamura, T. Ogura, & H. Shirai (Eds.), *Studies in language sciences*. Kuroshio

## 2002年度研究成果

Publishers.

- Kiyonari, T., & Yamagishi, T. (in press). Ingroup cooperation and the social exchange heuristic. In R. Suleiman, D. V. Budescu, I. Fischer, & D. Messick (Eds.), *Contemporary psychological research on social dilemmas*. UK: Cambridge University Press.
- 室橋春光 (2002). 認知の基礎過程の発達と障害. 田島・子安・森永・前川・菅野(編)『認知発達とその支援』(pp.148-162). ミネルヴァ書房.
- Ohtsubo, Y., Fujita, M., & Kameda, T. (in press). How can psychology contribute to designing a mixed jury system in Japan?: Ongoing debates and a thought experiment. *Progress in Asian Social Psychology* (Vol. 4).
- Otsu, T. (2002). Prolog as a model search engine for data analysis. In S. Nishisato, Y. Baba, H. Bozdogan, & K. Kanefuji (Eds.), *Measurement and multivariate analysis* (pp. 289-300). Springer-Verlag.
- Otsu, T. (2002). Automatic generation of intervention effect estimation formula. In H. Yanai, A. Okada, K. Shigemasu, Y. Kano, & J. J. Meulman (Eds.), *New developments in psychometrics* (pp. 381-388). Springer-Verlag.
- 大津起夫・松尾寛子 (2002). 尺度混在データのための主成分分析. 柳井晴夫・岡太彬訓・繁栄算男・高木廣文・岩崎学(編著)『多変量解析実例ハンドブック』(pp. 648-658). 朝倉書店.
- Otsu, T. and Matsuo, H. (2002). MTV and MGV: Two criteria for nonlinear PCA. In Y. Baba, A. J. Hayter, K. Kanefuji, & S. Kuriki (Eds.), *Recent advances in statistical research and data analysis* (pp. 85-114). Springer-Verlag.
- Saito, D., & Otsu, T. (2002). Another aspect of psychometrics; Surveymeta-data description by XML. In H. Yanai, A. Okada, K. Shigemasu, Y. Kano, & J. J. Meulman (Eds.), *New developments in psychometrics* (pp. 617-622). Springer-Verlag.
- 佐々木亨 (2002). ミュージアムにおける評価手法の種類と導入について. 岩渕潤子(編著)『産業化する芸術の可能性』(pp. 114-137). 都市出版株式会社.
- 佐藤公治 (2002). 異学年合同学習と意味の共同的形成. 神戸大学付属明石小(編)『縦型総合学習の展開とその可能性』(pp. 156-158). 東洋館出版社.Takahashi, N. (in press). Generalized exchange. In G. Ritzer et al. (Eds.), *Encyclopedia of social theory*. Sage.
- 竹澤正哲・亀田達也 (2002). 所有と分配一共同分配規範の社会的発生基盤に関する進化ゲーム分析. 佐伯胖・亀田達也(編著)『進化ゲームとその展開』(pp. 129-156). 共立出版.
- Tindale, R. S., Kameda, T., & Hinsz, V. B. (in press). Group decision making: Review and integration. In M. A. Hogg & J. Cooper (Eds.), *Sage handbook of social psychology*. London: Sage.
- 山岸俊男 (2002). 社会的ジレンマ研究と新しい動向. 今井晴男・岡田章(編著)『ゲーム理論の新展開』(pp. 175-204). 須草書房.
- Yamagishi, T. (in press). Cross-societal experimentation on trust: A comparison of the United States and Japan. In E. Ostrom & J. Walker (Eds.), *Trust and reciprocity: Interdisciplinary lessons from experimental research*. New York: Russell Sage Foundation.
- 山岸俊男・清成透子・谷田林士 (2002). 社会的交換と互酬性:なぜ人は1回限りの囚人のジレンマで協力するのか. 佐伯胖・亀田達也(編)『進化ゲームとその展開』. 共立出版.

## 2002年度研究成果

- Kameda, T., & Nakanishi, D. (in press). Does social/cultural learning increase human adaptability? Rogers's question revisited. *Evolution and Human Behavior*.
- Kameda, T., Takezawa, M., & Hastie, R. (in press). The logic of social sharing: An evolutionary game analysis of adaptive norm development. *Personality and Social Psychology Review*.
- Kameda, T., Takezawa, M., Tindale, R. S., & Smith, C. (2002). Social sharing and risk reduction: Exploring a computational algorithm for the psychology of windfall gains. *Evolution and Human Behavior*, 23, 11-33.
- Kishi, R., Kitahara, T., Masuchi, A., & Kasai, S. (2002). Work-related reproductive, musculoskeletal and mental disorders among working women- history, current issues and future research directions. *Industrial Health*, 40, 101-112.
- Kitayama, S., & Ishii, K. (2002). Word and voice: Spontaneous attention to emotional speech in two cultures. *Cognition & Emotion*, 16, 29-59.
- 真嶋良全・瀧川哲夫 (2002). 受容方略課題と仮説評価課題における仮説検証過程. *心理学研究*, 73, 42-50.
- 牧村洋介・山岸俊男 (2003). 成員間に相互作用がある集団における集団間報酬分配に関する実験研究. *心理学研究*, 73, 488-493.
- 嶺岸裕史・西山あかね・後藤広太郎・室橋春光・高橋誠 (2002). 学習障害 (LD) 児における到達運動の適応過程. *電子情報通信学会信学技報*, MBE2001-181, 127-132.
- 宮崎拓弥・本山宏希・菱谷晋介 (印刷中). 名詞・形容語の感情価: 快一不快次元についての標準化, イメージ. *心理学研究*.
- Molm, L. D., Takahashi, N., & Peterson, G. (in press). In the eye of the beholder: Procedural justice in social exchange. *American Sociological Review*.
- 中西大輔・亀田達也 (2002). 文化的進化. *言語*, 31, 12-15.
- 中西大輔・亀田達也・品田瑞穂 (印刷中). 不確実性低減戦略としての社会的学習: 適応論的アプローチ. *心理学研究*.
- Ohtsubo, Y., Masuchi, A., & Nakanishi, D. (2002). Majority influence process in group judgment: Test of the socialjudgment scheme model in a group polarization context. *Group Processes and Intergroup Relations*, 5, 249-261.
- 佐藤公治 (2002). 子どもの学びを評価する—活動と過程を重視した評価とその必要性. *教育創造*, 142, 6-9.
- Schellenberg, E. G., Adachi, M., Purdy, K. T., & McKinnon, M. C. (2002). Expectancy in melody: Tests of children and adults. *Journal of Experimental Psychology: General*, 131, 511-537.
- 品田瑞穂・亀田達也 (印刷中). 社会的ジレンマ状況における行動戦略の自生に関する実験的研究. *心理学研究*.
- 谷田林士・下間恵梨・真島理恵・馬麗麗・山岸俊男 (印刷中). 協力者と非協力者の顔写真の再認. *心理学研究*.
- 寺井滋・森田康裕・山岸俊男 (印刷中). 信頼と継続的関係における安心: リアルタイム依存度選択型囚人のジレンマゲームを用いた実験研究. *社会心理学研究*.
- 篠貴代美・阿部純一 (印刷中). 音韻性錯語は出力段階の音韻処理のみに起因するのか. *北海道心理学研究*.
- Yuki, M. (in press). Intergroup comparison versus intragroup relationships: A cross-cultural examination of Social Identity Theory in North American and East Asian cultural contexts. *Social Psychology Quarterly*.

### お知らせ

次号の Newsletter No.3 では、第2回・第3回国際シンポジウムの紹介と、本研究センターにおける研究の紹介を行います。

### 21世紀COE

#### “心の文化・生態学的基盤”研究教育拠点



〒060-0810

札幌市北区北10条西7丁目

北海道大学文学研究科行動システム科学講座

TEL: 011-706-3047

Email: cefom@let.hokudai.ac.jp

Homepage: <http://lynx.let.hokudai.ac.jp/COE21>